

教 育 民 生 常 任 委 員 会 報 告 書

議 長	事務局長	次 長	書 記
			

会 議 日 時	令和4年2月25日（金） 午後1時30分 ～ 午後4時45分			
会 議 場 所	○議員控室 ☒ 委員会室 ○議会図書室 ○その他（ ）			
出 席 者 数	委員 5名のうち出席者 5名			
出 席 委 員	委 員 長	古 谷 幹 夫	委 員	田 邊 哲 夫
	副委員長	武 田 秀 義	委 員	堀 本 伸 一
	委 員	水 間 淳 一		
欠 席 委 員				
説 明 者	教育委員会	教育長 山脇光明	学校教育課	副課長 東 孝典
		教育次長 浜田章克		政策監 大元 学
	生涯学習課	課 長 林 瑞穂	文化的施設 整備推進室	室 長 大河原信子
		副課長 佐竹あゆみ		主 任 松下理恵
	学校教育課	課 長 岡 英祐		
傍 聴 者				
付 議 事 件	1. 保育所の現状と課題について			
	2. 保育所と小学校との連携の現状と課題について			
	3. 教育研究所の現状と課題について			
	4. その他			
審 査 ・ 調 査	1. 保育所の現状と課題について			
	林生涯学習課長より町内11ヶ所の保育所について建築年月日、面積、定員、児童数、職員数を取りまとめた資料に基づき説明を受けた			
	・見付、くぼかわ保育所は旧窪川地域にある大きな保育所であるが老朽化への対応が今後の課題。			
	・興津保育所については今後のあり方を検討する必要がある。			
	・低年齢化、発達障害児の増加傾向が見られ、加配対応が必要となっており、保育士不足の解消が課題である。（会計年度任用職員の比率が高いこと、再雇用への対応が必要）等の現状と課題について協議を行った。			
	○委員からの主だった意見等			
	・松葉川保育所では水漏れ等施設問題があると聞く。他の施設での状況把握はどうしているか。（武田委員）			

	⇒毎月所長会を実施。年1回教育委員会で施設訪問を行い、現況・課題を把握している。急を要したものは3月補正で対応したい。(林生涯学習課長)
	・保育士の不足を聞く。見通しとバランス、課題をどう把握しているか。(堀本委員)
	⇒児童数は着実に減少傾向だが保育士の増加は厳しい状況。特に年度途中の対応が難しいが余分の配置は厳しい状況だ。(林生涯学習課長)
	・松葉川保育所の建替え、移設等の検討はされているか。(水間委員)
	⇒小学校適正配置の絡みがあり方向性を定めにくい現状にある(林生涯学習課長)
	⇒松葉川地区は令和6年4月目途の計画であったが7年度以降に延ばすと説明している。松葉川地区に1校は残してほしいとの要望があるが、その方向になるかどうかといった状況だ。(浜田教育次長)
	・合併以降かなり統廃合が進んだ。統合した後をどうするのかしっかりした方向性を持つことが重要だ。大奈路保育所跡の活用をどうするのかとの声がある。課題解決に向け、地元の声捉え、明確な方向性を示すべきだ。(田邊委員)
	⇒大奈路保育所跡地の件は普通財産となっており、大正振興局でその後の活用を検討している。(林生涯学習課長)
	・適正配置に関連して、学校は地域にとって住民の拠点としての感覚が強い。行政がしっかりとした方向性をもって対応することが重要だ。(堀本委員)
	・保育士の不足に関しては、給与面での待遇に課題あるのではないかと(武田委員)
	⇒町立保育所の職員は一般職と同等の待遇。児協のそれは町職に準じた待遇。他市町村と比較しても遜色はないと考えている。(林生涯学習課長)
	2. 保育所と小学校の連携の現状と課題について
	岡学校教育課長より準備していた資料配布(・四万十町教育振興基本計画、・子育てでなやんでいることありませんか:小冊子)を受けた後、保育所と小学校の連携(SWの関わりから)～発達障害児の保育と小学校の連携についてを現状報告中心に説明を受けてから、質疑応答を行った。
	・発達障害については親が非常に悩む現状がある。経験のある人が真剣に対応することが必要。普通の子どもたちと一緒に過ごせる環境を作っていくことが重要だ(田邊委員)
	⇒教育委員会でも検討を重ね、常に見直しを行なっている。(岡学校教育課長)
	⇒障害の件数は多くなっており情緒学級を中心にここに応じた対応をとっている。(山脇教育委員長)
	・説明を受け、発達障害児が増加していることに危惧の念を抱く。障害が多様化

	している現状では気遣いをする周りの対応も大切だ。(堀本委員)
	・10年前と比べ、特別支援学級の生徒は増加しているのか。(水間委員)
	⇒ここ10年間で少しずつ増加傾向にある。以前に比べ支援対応の裾野が広がり
	声が上がってきたこともあると思う。(浜田教育次長)
	・発達障害まではいかなくても何らかの要因で不登校が増えていると聞くが。
	(堀本委員)
	⇒不登校については、①個人的な動機②経済的な動機③保護者が学校を否定等が
	ある。(岡学校教育課長)
	⇒①②については徐々に効果が出てきているが③が問題となっている。(浜田教
	育次長)
	⇒学年が上がるにつれ学校の勉強についていけなくなり、情緒不安定になる。
	発達障害児等の特別支援学校は増加しており、小学校では1人で4人まで対応
	可となっている。しかし一般的には情緒学級は高校にはないのが現状で、小学
	校～中学校で十分な対応が必要だ。
	保育所では加配保育士で対応、小学校では特別支援学級で対応。
	窪小では「通級指導教室」があり、1～6年生で8人が通っている。他の自治
	体よりも多い実態にある。(山脇教育長)
	3. 教育研究所の現状と課題について
	岡学校教育課長より学校教育研究所の概要について説明を受け、特に不登校児童
	への対応について説明を受けた後質疑応答を行った。
	○不登校児童の対応については、現在四万十町で3ヶ所の教育支援センター(か
	げつ教室、たのの教室、とおわ教室)で支援をおこなっている。
	○不登校となる児童・生徒の原因は、学力不振・発達特性(発達障害など)・家
	庭の問題(環境、ヤングケアラー、親の不安定など)等さまざまな要因があ
	り、直近の把握件数は60件
	○対応者は、教育相談員、SSW(スクールソーシャルワーカー)、支援センター
	指導員などで対応
	(対応の成果)
	①SC(スクールワーカー)が教育支援センター配置となり、通室生の保護者と
	つながることができた。
	②SSWが保育所、学校の支援会に行くことにより、特性のある児童や生徒が支
	援センターや学校に通うことができるようになった例もある。
	③相談員やSSWが入ることによって、引きこもりには至らないケースもある。

	④ S S Wが医療機関や専門機関につなぎ、学校への支援につなげることができている。		
	⑤支援センター指導員の進路指導により目指す高校を見つけ、学習に取り組む生徒もいた。		
	(課題)		
	①把握件数は60件であっても研究所とつながらないケースもあり、個に応じた対応ができないまま、不登校傾向が続く子がいる。		
	②さまざまな原因に対応するため学校との連携が必要。		
	③進路の保障		
	④発達障害の理解不足から関係機関（医療等）へのつながりに困難さがある。		
	⑤家庭(保護者)や学校、S S Wや相談員とのスムーズな連携が必要		
	⑥S CやS S Wの上手な活用への理解		
	⑦相談業務の増加等		
	以上の点を確認。		
	4. その他		
	①文化的施設について		
	○文化的施設の進捗状況について、大元政策監より資料に基づき説明を受けた。		
	⇒3月には全員協議会で報告することを確認。		
	○意見公募では3人より24件の意見あり（大河原室長）		
	○公募意見についてはサービス計画に反映していく（大元政策監）		
	○実施設計は10月に完成する予定（大元政策監）		
	②委員会活動報告について		
	○文化的施設への対応を中心に委員長が整理することを確認		
	以上の件を踏まえ16時45分に閉会とした。		
反対意見			
報告日	令和4年5月26日（木）	委員長署名	古谷 幹夫 